

伊予地方へ侵入したコカナダモを追って

平井 屯

1. コカナダモの発見

川掃除のときコカナダモを採集したのは1975年の9月であった。これまでに身近にある用水路を探り、滋賀県の高島町(1974年)の用水路や琵琶湖でもコカナダモを追っていた。観察できたのはクロモであったと記憶している。愛媛県松前町で確認後に、再び高島町を訪れ(1976)、前回と同じ用水路を観察した。同じ水路に見かけられたのはコカナダモでクロモは一株もなかった。恐らく74年に観察したものはコカナダモであろう。クロモと識別できる知識を持っているつもりであっても、悲しいことに紙上¹の知識、クロモに見えたものだろう。

こうしてコカナダモとのつき合いが始まった。松前町の分布はどうか、水路を四方へ探る毎日が続いた。慣れてみると岸の上から観察しても違いは明らかであった。コカナダモがあると確信して採集しなかったことが悔やまれてならない。こうして国近川水系にそった分布を明らかにさせることができた²。同水系の南部にある長尾谷川と横田部落の水路にはクロモがあつてコカナダモは一本も観察されなかった。

横田と長尾谷川の間には、乾期には定常流のない天井川である大谷川がある。国近川水系と連続していないので、コカナダモがこのあたりに侵入するのは10年後であろうと、のんびり構えていた。ところが1979年に国近川水系とつながる塩屋地区にコカナダモを採集するに及び、再調査を実施した³。

塩屋の上流域である西高柳には75年すでにコカナダモの2群落があつたので、分布拡大は予想していたものの驚くべき速さであった。西高柳より水路は続いているとはいえ、水流は少なく冬期は流れない。水路には岸より各種の草本が侵入し、コカナダモの流下は容易でない。周辺の調査につれ、70haの全面に分散し純群落を形成していた。さらに横田部落の用水路にもコカナダモを発見、大谷川を越えて分散していた。10年後の予想は覆されてしまった。

2. コカナダモの定着

国近川水系の下流域は、1969年に改修され直線に近くなり、河口部に海水侵入を防止する電動せきが設けられている。上流は昌農内西部より二本の河川となつて、透明度の高い隅田川と汚れの強い大井手川に分かれる。二本の河川にコカナダモが定着しており、植物体の切れ

はしの流下により、大群落を形成するものと予測していた。

80年になるにもかかわらず、用水路にみられる大群落を形成しない。岸近くにあるマコモの周辺にコカナダモが生活しているにすぎない。しかも流れの中央部から岸よりかけ、クロモが優占するように見うけられる。水位がせきのため毎日上下し、透明度も不良であり、植物体を伸長させるクロモの生活が残されるものだろうか。再調査を要する区域である。

周辺の用水路はコンクリートの三方張りへ改修が進行している。底質のコンクリート化により、多様な生物相が失われる。しかし、コンクリート面にアオミドロ類が定着し、各種の沈でん物を中心に砂や泥が推積してくると、水流の緩やかな場所の推積物を拠点としてコカナダモ群落が形成される。例年の川掃除により失われるにもかかわらずコカナダモの生活が保障されている。これらの用水路の水源となる泉や国近川水系にあるコカナダモがポンプアップされる水流により補給されるからだろう。川掃除後でも植物体の一部は残されるので、夏には掃除の厄介者としてコカナダモが再登場してくる。

3. 農業用水路の変貌

コカナダモやクロモの生活する用水路は、岸の草刈りと川ざらえで維持されていた。ホタル類を始めとして、水流の絶えない場所には、多様な生物相があつた。水深も浅く安全な子どもの遊び場所であつた。

しかし、コンクリートになり、川掃除もきられ、住宅の増加につれドブ川となりつつある。さらに小川の家庭排水による汚染さえ忘れられ、道路の拡張により光を失って地下へと移行している。水生植物はいうに及ばず小川の存在さえ忘れられつつある。かつて豊富であつたコウホネなどを失った小川は、死滅へと向っている。死滅への進行の中で、植生の回復した最後の姿をコカナダモが演じている。

川掃除のかまの先に引掛かつたクロモをコカナダモと同定したように、身近な自然を見る場所を残したいものである。いろいろな生きものに接する場合は、環境教育の場として重要なはたらきをもっている。身近にある自然の失われる毎日は、私の郷土とはかぎらない。広く進行する河川の汚染はとどまることを知らないように見うけられる。

1. 北陸の植物 20(1) 1972
2. エヒメアヤメ 25 1976
3. エヒメアヤメ 28 1980